

保育の中の小さなこと大切なこと ⑥

—— “しかる” ということ ——

守 永 英 子

ある研究会で、小学校の先生から、幼稚園での子どもの扱い方について、次のような意味の質問が出された。“幼稚園では、子どもがいけないことをしても、しからぬのですか。しかるとすれば、言葉で言いさかせるのですか。それとも、小さい子どもは、からだで覚えさせるといふけれど、例えば、人をけつたら足をたたくというようにして教えるのですか”

これを契機に、“しかる”とは“私にとって、どういふことなのだろうか”と、自分自身に改めて問い直してみた。

五月初めのある日、A男が私のところにとんできて、「先生、大変だよ。Jちゃんが石を投げて、ガラスを割っちゃったよ」と言いに来た。A男について行ってみると、“子どもの家（別棟の和室）”の窓ガラスが割れている。「Jちゃん、あっちに逃げちゃったよ」とA男の指さす方へ、J男を捜しに行きながら、私は困惑を感じていた。

J男は、他園で一年間幼稚園生活を経験し、今年四歳児のクラスにはいってきた子どもである。入園してまだ一か月であったが、新入の子どもの中では、最初から抵抗なく遊べるために、かえって私とのふれ合いが、まだ少ない子どもであった。

● A男の言うように、過失でなく、故意に窓ガラスに石をぶつけて割り、逃げてしまったのなら、しからなければならぬ。

しかし、これから育てていかなければならないJ男と私との関係に、このことがマイナスになつてはならない。

この二つを軸にして、方法を模索しながら、私はJ男の姿を捜した。私の姿を見るとJ男は、これからの成行きを恐れるかのように、あとずさりしたが、私がかがめるより事情を知りたがっていることが分かったのか、意外にスムーズに話してくれた。“子どもの家”にはいらたかったこと、「入れて」といってもA男が入れてくれないこと、窓からはいるうと思つて石をぶ

つけたこと。

私はJ男に、

• 入れてくれなければ、そのことを私に話すこと、そうすれば私がいっしょに頼んであげること

• 窓からはいるのは、泥棒とまちがえられるような、いけないことであること、はいる時は玄関からはいること

• 窓に石を投げて、わざと割るのは、みんなのものをこわすいけないことであること

などを話した。そして、ガラスをこわしたことを、自分で、教頭のH先生にお話し、お詫びして直して下さるようお願いすることを示唆した。故意にガラスを割ったことの償いとして、きちんと事後処理をさせたかったし、H先生にことわりに行かせたのは、その行為を勇気づけてやり遂げさせるためには、J男と私は相対する立場に立つのではなく、私も彼の側に立って、いっしょにあやまってあげることが必要と思われたからである。H先生からは、私がJ男に言ったことと、ほぼ同様の言葉があり、最後に「ガラスは直すから心配しないで大丈夫よ」と慰められ、私も、J男の努力をねぎらう気持ちで「よかったわね。ガラスは直して下さるって」と声をかけた時には、

J男の目から、こらえていた涙が一度にあふれ出た。

このあと、事件のきっかけとなった「子どもの家」へJ男といっしょに行き、A子の拒絶をなだめながら、J男や、他の子どもたちと絵本を読んだ。私の心配をよそに、J男は明るい顔で帰途に着いた。

「しかる」ということは、私にとって、たたくことでも、ただ単に言いきかせることでもなかった。とがめられ、改めなければならぬ行為も、それが起る状況や、子どもの心の動きがある。そして、起ったあとには、(大人の処置を含めて)その事を受けて、それに続く、子どもの心の動きと展開がある。心を開いて、その行為の前を見、あとを考へる時に、そこから「扱い方」が出てくるのではないかと思う。

さらに、当事者でない周囲の子どもたちも、その成行きを見守っていることであろう。保育者の話すこと以上に、そのふるまい方が、彼等の、他人に対する態度に、恐らくより一層影響を与えらるであろうことを思う時、慎重に考えなければならぬとしみじみ思うのである。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)